

Title	通俗和英節用集：明治期英和・和英節用集の世界（その1）
Sub Title	Concise English-Japanese and Japanese-English dictionaries in early, middle Meiji period (1)
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.46 (2005. 3) ,p.9- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20050331-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

通俗和英節用集

——明治期英和・和英節用集の世界（その1）——

関 場 武

金原君，ボクが君に初めて会ったのは，今から40余年前，第1校舎110番教室であった池上忠弘先生の英作文の時間だった。君は英文，ボクは国文の2年生ということで，どうしてそうなったのかは思い出せないが，ともかく一緒に授業を受けていた。そこで，国文の小林勇君に紹介されて，ボソボソと，途切れ途切れの会話を始めたのだった。

それから大分経った後，ボクが日吉主任になってから，あの懐かしくもぬくもりのあった研究室の談話室で，時々顔を合わせるようになり，また，とぎれとぎれの会話が始まった。あるとき君は，「藝文研究」に載った僕の英学関係の小論を読んでくれて，真面目な顔で，ややせきこんで「セキバさん，あそこに出てる本，皆持っているのですか？」との質問。それに対して，「うん，恥ずかしながら遊びというか病気というか，時間とお金を使い，足を棒にして，蒐めたりしてるんだ」等と，ことばを交したことを思い出す。

金原君，覚えていてくれるだろうか？ 今度もちょっとした報告を書いてみたのだけれど，読んでくれるだろうか？ でも，きっとまた君は訊ねるだろう。「項目の数なんかも，自分で数えるんですか？」と。「うん，そう。まあ，今でもバカやってるんだ。自分なりの勉強止めちゃったら，お終いだから」等とボクは答えるにちがいない。金原君，どうか安らかに。いずれまた，話そう。海保さんにもよろしく。

明治期に出版された英和・和英辞典，初等入門書で，管見に入った「節用集」あるいはそれに関連する書名を有するものは7種9点ある。英学関係の資料の解題は，竹村覚「日本英学発達史」や荒木伊兵衛「日本英語学書志」，「大阪女子大学蔵日本英学資料解題」等が夙に著名である。これから紹介するものも，大半はそれらの中で多少取り上げられているが，重複を厭わず，小生なりのやや詳しい解題を記すこととしたい。

I

はじめに「節用集」についてふれる。「節用集」とは，簡単に言うと，室町時代の半ば，文明年間（1469～87）頃に成立した用字用語辞典である。はじめは写本として行われていたが，天正18（1590）年の泉州堺版，文禄（1592～96）頃と言われる林宗二の饅頭屋本あたりから版本の時代へと移行し始める。そして，慶長2（1597）年跋刊の易林本以降，近世初頭の印刷文化興隆の波に乗って次々と版刷を重ね，辞書の代表格として定着する。「節用集」は，古語・外来語を含む日用の国語語彙を頭字イロハ順に配列し，その内部を乾坤（天地）・時節（時候）・官位・支躰・草木・言語（言辞）等の部門に分けて，見出し語に該当する漢字表記を示し，時に簡単な語註を付すというのが，普通のスタイルであるが，易林本以降，項目の配列順や検索方法に改良を加え，より見やすく引き易くする工夫が為されて行く。その中で，宝暦2（1752）年に登場し，以後の辞書・辞典・名彙類の編成に絶大な影響を与えたものが早引き方式である。

早引き方式。これは，前述の如く，それまでの節用集が，語彙の配列に当たってイロハ分けのほかに部門別けを採用していたのを，部門別けを取り払い，仮名表記の数によって語を配列し検索する方式にしたもので，利用者が自分の調べたい語の所属部門について頭を悩ますことなく引けるといって，画期的なものであった。現在，早引き方式を採る節用集の中で一番夙い宝暦2年初冬版「〈宝暦新撰〉早引節用集」の「凡例」には，次のようにある。

一、世ニ有ルトコロノ節用ハ、乾坤門・言語門等ノ部分十三門或ヒハ十五門ニヨリテ字ヲ搜ル、然レドモ部門繁キニヨリテ、却テ混雜ノ事多シ

一、此節用ハ部門ニヨラズ、訓讀（よみこえ）ノ假名ノ数ヲ以テ文字ヲ求ム、急時ノ便ナル事、他に異ナリ

そして、その新方式に馴染んでもらう為に、「文字引様」と題して

〈い一〉伊。意。猪。訓讀一声（ひとこえ）の分此部に入ル

〈い二〉池。色。伊勢。二声の分此部に入ル 〈い三〉祝。医者。煎海鼠（いりこ）。三声の分此部ニ入ル 〈ろ四〉論談。六波羅。四声の分此部ニ入ル 餘は之に准（なぞら）へ訓讀の数を以てくり出す

と実例を示し、検索方法を説明している。いずれにしても、本書はひとたび世に出るや大いに迎えられ、陸続と刊行され、明治期に入っても、「〈音訓〉文明早引節用集」（明治12）「〈開化新增〉大全早引節用集」（同13）などの早引節用集や、書名に早引きとは謳っていないが組織は早引きである「〈雅俗〉新撰以呂波字引大全」（明治11）「〈新選増補〉いろは節用」（同14）等の「いろは字引」、さらには大正・昭和初期の「大正いろは字典」（大正11）「〈昭和〉いろは字典」（昭和3）といった「いろは字典」にまで受け継がれて行く。すなわち、英和や和英の節用集が編纂・刊行された明治期に於いては、「早引節用集」や「節用集」は、まだまだ盛んに行われていた現役の辞典であった。したがって、その検索方式や組織に倣っての英和あるいは和英の節用集類も誕生したわけである。

II

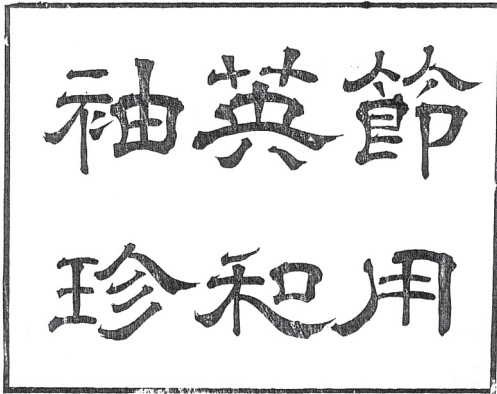
以下「節用集」またはそれに関連する書名を有する明治期の英学関係資料の解題を記す。原資料には英語の発音に関し振り仮名が付いているケー

スが多いが、怪しげな発音が目立ち、一方、繁雑な組みともなるので、一部を（ ）内に残し、大半は省略に従った。また角書は〈 〉で括った。殆ど手近の資料によったので、諸本中の一本に関する報告としてお読み頂ければ幸甚である。

【1】袖珍英和節用集 〔初編〕

美濃半切（＝B6）左袋綴 横本1冊。青黛色地に紗綾形模様空押し表紙。題簽：子持ち杵付短冊形白紙，表紙中央上に寄せて貼付。「〈袖珍〉英和節用集」。内題：ナシ。封面：黄紙，単杵内に左方より「袖珍／英和／節用」と書名のみ記す。序：「袖珍英和節用集序」（明治4年辛未11月 吉田耕識）。版心：上 黒魚尾，「袖珍英和／（丁付）／三書房」。但し巻頭4丁および奥付には丁付無く，第2,3丁目は版心題の下に「亜彼泄」，第4丁目には「伊呂波」と記す。丁付：一（～九十六）。丁数：1（序）＋2（亜彼泄）＋1（イロハ分け目録）＋96（本文）＋1.5（奥付），全101丁半。匡郭：単辺，本文部分は罫線付10行。尾題：本文末に「THE END. 大尾」とのみあり。刊記：終丁オに左から「明治四年辛未十一月刻成／吉田庸徳著／中村最文蔵板／東京書林 小林喜右衛門 泉屋半兵衛發兌」とあり，ウおよび後表紙貼付の半丁に，西京・出雲寺文治郎，村上勘兵衛の2名，浪花・河内屋喜兵衛，秋田屋市兵衛，敦賀屋九兵衛の3名，そして須原屋茂兵衛，山城屋佐兵衛～鶴屋喜右衛門までの38名の東京書肆名を列記する。

序文に「初学入門を便にせんかため，世に行はるゝ伊呂波引節用集の体裁に倣ひ，部類を区別し，譯音の数に従て次序を定め，以て探索を便にす」とあるように，本書は「早引節用集」の体裁に倣い，綴じ目録を頭にして振り仮名付で日本語を音節数順に排列し，対応する英語を発音振り仮名付でその右に出している。先行文献でも指摘されているように，【イ二】に Ston（石），Rok（岩），Chaire（椅子），【イ三】に Physician（医者）等といっ



「袖珍英和節用集」
初編・封面

た綴り違いが散見され、発音もチャイル (Chaire), コーシン (Cousin・従兄), スタールス (Stars・星), ペーボル (Paper・紙), 等の如く、間違い又はお世辞にも上手とは言えない例が目につく。

収録語彙数は、【伊ノ部・イー】 膽: Gall (1 項目), 【イ二】 池: Pond ~ 狗: Dog (12 項目), 【イ三】 泉: Fountain ~ 鼾息 (いびき): Snoring (15 項目) から, 【須ノ部・ス四】 墨壺: Inkstand ~ 隧道: Tunnel (8 項目), 【ス五】 衰弱: Debilitation (1 項目), 【ス六】 水曜日 (スイヤウニチ): Wednesday ~ 数学者: Mathematicion 〈ママ〉 (3 項目) までの 1534 項。末に順序数 (第一~第百), 数字 (一~百万, 途中で本書の刊行年である一千八百七十一アリ) あり。また, 巻頭 2 丁分に Common alphabet (通例ノ亜彼世), Manuscript (筆記ノ文字) として各々大文字・小文字を示す。

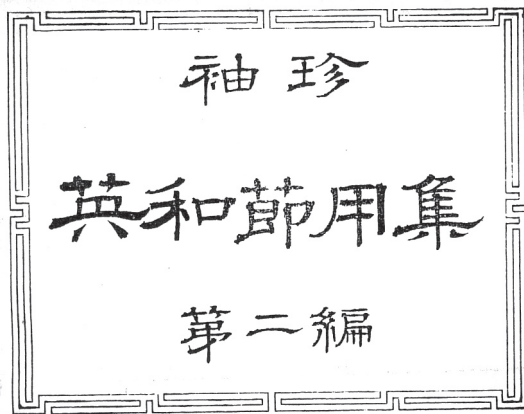
【2】 袖珍英和節用集 第二編

装丁初編に同じ。異なる部分のみ以下に記す。題簽: 「〈袖珍〉英和節用集 全」。封面: 黄紙, 飾り枠付。「袖珍／英和節用集／第二編」と 3 段に左横書きで書名を出す。本書には初編に無かったタイトル頁がある。「SECOND BOOK OF THE JAPANESE AND ENGLISH

LANGUAGE. BY Y.D.TSUNENORI, WAKABAYASI, TSURUYA, HUMIYA, & CO. TOKEI THE 5TH YEAR OF MEI-ZI.(1872.)」 と記し、ウラに「英學／必携」の印記を刻す。内題、序：ナシ。丁付：一～百七十。但し巻頭2丁および奥付には丁付ナシ。丁数：1(扉) + 1(イロハ分け目録) + 170(本文) + 1.5(奥付)，全173.5丁。刊記：終丁オに左から「明治五年壬申八月新鐫／回春樓蔵版／東京／書林／若林喜兵衛／鶴屋喜右衛門／二三屋三二發兌」とあり、ウおよび後表紙貼付の半丁に、京・出雲寺文次郎～田中治兵衛の4名、阪・河内屋喜兵衛～河内屋徳兵衛の7名、須原屋茂兵衛～鶴屋喜右衛門の37名の東京書肆名を列記する。

初編と異なり、本書は早引きのスタイルは採らず単純なイロハ引きである。はじめの115丁が[正編]、116オ～170ウが「追加熟語」となっている。初編と違い動詞や形容詞・副詞の類、それにフレーズが多く収載されているのが特色である。

収録語彙数は、【いの部】緯度：Letitude (ママ)～言消ス：Unsay (99項目)、【ろの部】論：Tracktation～論説スル：Treatise-ed-ing (18項目)、



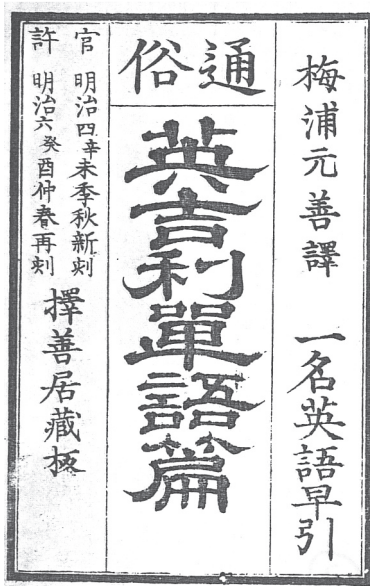
「袖珍英和節用集」
第二編・封面

【はの部】凡例：Preamble～放蕩スル：To run riot（78項）～【せの部】政度：Polity～世話スル：Provide-ed-ing（39項目）、【すの部】水星：Mercury～好テ居ル：In love（38項目）の2263項目。「追加熟語」は、【いの部】今一度丈ケ：As much again～戒シメル（56項）、【はの部】放ツ：To break loose～発言セヌ：To hold one's peace（59項）～【せの部】詮議スル：To put to trial（ママ）～全体：Upon the main（18項）、【すの部】吸込ム：To bear up in～数度：Many time（ママ）（12項）の919項目。合計で3182項目、初編の約2倍である。

初編と同じく Poen（ポーム）（詩）、Geoy（ゼオロジー）（地質学）、Undersranding（アンドルスレンディング）（智識）、Catatogue（ケテトギュー・目録）といった綴りの間違い、イツス（Its・夫）、ボイルス（Birth・出生）、ツー ルーク ホル（To look for・待テ居ル）といった怪しげな発音註も散見される。また〔正編〕【すの部】「捨子」には、英語が示されておらず、「追加熟語」では、【けの部】とあるべき門標が【はの部】と誤刻されている。

【3】〈通俗〉英吉利単語篇 一名英語早引（再刻本）

中本 左綴 2冊 黄表紙 題籤：表紙中央上寄り、子持ち枠付。「〈通俗〉英吉利単語篇 上（下）」封面（上巻前見返し）：子持ち枠付、界線でタテに3つに区切り、中央に書名、左に「官許／明治四辛未季秋新刻／明治六癸酉仲春再刻／擇善居蔵板」、右に「梅浦元善譯 一名英語早引」と記す。内題・尾題ナシ。版心：〈本文〉上魚尾黒「通俗英単語 卷之上（下）（丁付）」。下巻末広告には版心題の代りに「西洋書屋書目」と入る。丁付：〈本文〉（上）一～四十二、（下）四十三～八十四。他に下巻末の広告に一、刊記部分に一～三の丁付あり。丁数：（上）1（序）+ 42、（下）42 + 1（広告）+ 3.5（奥付）。刊記：（上）終丁ウ匡郭内に「擇善居蔵版／官許／明治四辛未季秋新刻／明治六癸酉仲春再刻」下方子持ち枠内に「蔵印之記」の大型朱印。後表紙見返し匡郭内に「東



〔〈通俗〉英吉利單語篇〕
再刻本・封面

京書林 和漢法帖所 江戸橋廣小路・丸屋半三郎，新聞雜誌捌所 日本橋釘店・和泉屋壯藏，西洋書屋 日本橋四日市・和泉屋半兵衛（朱印：西洋書屋），界線を置き左に本書ならびに戸澤光徳「同（通俗）法朗西單語篇」市川央坡「英吉利單語図解」横濱金本先生訳述「英語字引図解」4点の近刊予告を出す。（下）後表紙見返しは巻上と同じ。巻末に東京・西洋書屋 日本橋四日市・和泉屋半兵衛の広告あり，本書や戸沢光徳先生訳「通俗法朗西單語篇」吉田先生訳「英和節用集」等18点の「西洋書屋書目」を挙げる。その後，3丁にわたって浅艸觀音地内・山崎屋清七～室町二丁目・大坂屋藤助の65軒の東京書林・絵双紙問屋，9軒の東京舶来書店，それに4軒の横濱賣捌所を列記する。「袖珍英和節用集」二編の発兌元の二三屋三二は「和漢珍書店」とあり，東京舶来書店の中には，築地のハルトリーの名も見える。

本書の編纂意図は、以下に示すその「自叙」(明治四歳次辛未秋八月譯者識)に明らかである。

今既に世に行はるゝ所の英吉利単語篇、一小冊と雖も、切用枢機語大
概此に輯まる、実に其室に入らんとする者の好門戸と謂つへし、故に
平生これを語記黙識する者ハ、他日必らず思ひ半はに過ることあらん、
然れとも山間僻邑、師友に乏きの人、其白本にして讀難きを苦しむ、
是に於て、余、綴語を其上に加へ、雅俗の譯語を其傍に附して、以て
之を梓に上し、彼童蒙をして進歩の一助たらしむと云爾

すなわち慶應2(1866)年に開成所から初版が出、覆刻が繰り返された
「英吉利単語篇」の発音註付学習手引き書である。本書刊行の前年明治3
(1870)年にも蔵田屋清右衛門から翻刻本洋装1冊が出されているが(Book
of Instruction for The Children vol. I.) (小B 6, 76頁), 全5篇1490語の
うち、「〈通俗〉英吉利単語篇」上巻は Part I: 1. The table ~ 30. (A)pupil,
Part II: 31. The world ~ 130. A water-spout, Part III: 131. The fleet ~ 340.
(The)friend, Part IV: 341. The skeleton ~ 740. White bread, 下巻は Part V:
741. The meal ~ 1490. The Vistula を収める。しかし、訳語はともかく発
音註のほうは、ペーブル (Paper), ノルツ (North), ハルボール (harbour),
スコラル (scholar・学生), プロフェッソル (professor・大学者) の如く、
頂けないものが目につく。

本書の副題「一名英語早引」の「早引」とは、現代でも書名によく見か
ける「早わかり」に相当するもので、ぱっと見てすぐ分る、すぐに見つけ
出せるといった意味である。すなわち、前述の如く「早引節用集」は、江
戸時代後期から明治中期にかけて大流行するのであるが、次第に「早く引
ける」ということで、仮名数による検索方式を採らないものにも「早引」
の名が冠せられるようになる。例えば「〈神社仏閣〉都伊呂波分早引」(文
化8〈1811〉年刊, 小本1冊), 「早引塵劫記」(外題・封面: 早引塵劫記大成)

(同 11 年刊, 半紙本 1 冊), 「早引年歴通覧」(封面: 〈海内無雙／萬家至寶〉早引年歴通覧 一名配卦年代記)(嘉永 3 〈1850〉年刊, 折本 1 帖), 「早引紋帳大全」(同 2 年再刻, 袖珍本 1 冊), 「西国順礼早引道中記」(天保 12 〈1841〉年刊, 半紙三ツ切横本 1 冊) 等である。本書も, その伝による呼称である。それに連なる命名のものが, 次に挙げる「獨學英語早引」である。

【4】獨學英語早引

袖珍本 ボール表紙 銅版 左綴 1 冊。永田義原編, 明治 20 (1887) 年東京・聚英堂大川錠吉刊。定価 30 銭。序 + 88 頁。巻頭にアルファベット表, 習字法があり, はじめ 1 ~ 16 頁が「雑語」と題する図入りの単語集。Leaf: 一枚 ~ cup: 鍾 (チョコ) の 160 項。次に活字体のアルファベット表 2 頁があり, 19 ~ 80 頁まで日本語イロハ分け図ナシで, 【イノ部】一時: One.oelook (ママ) ~ 【スノ部】済: Fin の 1438 項。そして最後が「宇宙之部」と題するイラスト入りの単語集。Heaven: 天 ~ Dale: 谷までの 122 項。合計 1720 項。但し wallow (ワウラルロー) (燕), herse (ホース) (馬), The dcd (フクト) (寝床), Stupidity (スタピチイ) (愚鈍) のような, 発音や綴りの不備, 日本語にも黄大小足袋 (メリヤスタビ: stockings), 國 (ニク: native country) の如き誤りが散見され, 本書に限ったことではないが, 杜撰なものである。

この期によく見られるザラ紙袋綴。表紙は水色と黄色を基調とする色刷で, 橋の上で馬に跨る中国の武将 (「三国志」の関羽) と山岳を描く。緒言と奥付は紅色刷。緒言は潜瀧庵凌州。「我国英語学ノ旺盛ヲ成スヤ, 其流用萬国ニ冠タレバナリ, 然リト雖, 幼童ヲシテ英学ノ門ニ誘フノ著ナキヲ以テ, 余, 僅カニ是小冊ヲ編シ, 暫ク幼者ノ弄具ニ供シ, 他日英学入門ニ當リ裨益アラントス」とある。(以下次号)